

■ 教育講演5

六経弁証と臟腑弁証、傷寒と温病

菅沼 栄（日本医科大学東洋医学科）

傷寒論に中医学の整体観と弁証論治の概念が反映されている。

六経の経脈はそれぞれ関連する臟腑に絡属し、邪は経絡に侵入する場合には六経弁証を用い、邪が経絡から臟腑に侵入する時に臟腑弁証を引用する。

傷寒六経は経絡学説に基づき正邪の消長を重視し外感病に適する、臟腑学説は気、血、津液、精の理論を重視し内傷病に適する。

六経弁証と臟腑弁証の関係：太陽病は膀胱、小腸、肺を包括する、解肌發表、調和營衛の桂枝湯は虚性感冒、皮膚症状を治療する；辛温発汗、宣肺平喘の麻黄湯は感冒(流感)、喘息、浮腫の初期を治療する；利水通陽の五苓散は浮腫、下痢を治療し；破血下瘀の桃核承気湯は瘀血症、便秘、頭痛を治療する。陽明病は胃、大腸を包括する、清熱生津の白虎湯は発熱、糖尿病、痺証、皮膚疾患を治療し；峻下熱結の大承気湯は熱性便秘を治療する。少陽病は胆、三焦、肝を包括する、和解少陽の小柴胡湯は邪入少陽の肝胆疾患、肝胃不和の胃腸疾患、外感発熱、肝鬱脾虚の精神症状を治療する；和解少陽、通瀉熱結の大柴胡湯は肝、胆、脾臓疾患、偏頭痛を治療する。太陰病は脾を包括する、温中去寒の理中湯は脾胃虚寒の下痢、胃痛、腹痛を治療し、和胃降逆、除痞の半夏瀉心湯は寒熱挟雜、湿熱内蘊の胃腸疾患、肝脾不和の肝胆疾患を治療する。少陰病は心、腎を包括する、回陽救逆の四逆湯は厥逆の亡陽証、冷えを治療する；温陽利水の真武湯は浮腫、陽虚の下痢、眩暈を治療する；温肝暖胃、降逆止嘔の呉茱萸湯は肝胃虚寒の胃痛、嘔吐、頭痛を治療する。厥陰病は肝、心包を包括する、滋陰泄熱、温陽通降、安蛔止痛の烏梅丸は寒熱錯雜証の寄生虫、上熱下寒、寒熱錯雜の慢性胃腸炎、鬱病を治療する；温経散寒、養血通脈の当帰四逆湯は血虚、血寒、血瘀の冷え、痛証を治療する。

温病学説は内経の「冬傷於寒、春必病温」の記述、葉天士、吳鞠通によって理論体系が形成された。衛分証に辛涼宣肺、輕劑の桑菊飲、辛涼清解、平劑の銀翹散；氣分証に清熱生津、重劑の白虎湯；營分証に清營透熱、養陰生津の清營湯；血分証に涼血散瘀の犀角地黄湯；湿温毒に化湿避穢、清熱解毒に甘露消毒丹などの名方をまとめ、温病には辛温発汗、淡滲利尿、膩補薬、苦寒薬の使用を禁ず。

季節を強調する春温、秋燥、冬温；四時の主気を強調する春、冬の風温、夏の暑温、長夏の湿温、秋の秋燥；流行の特徴から温毒、温疫；初期の証候から新感温病の風温、温熱、秋燥、冬温、暑温、湿温；伏気の温病の春温、伏暑；疾病の性質から温熱型の春温、風温、温熱、秋燥、冬温、暑温、湿熱型の伏暑、湿温に等の分類がある。

風温は春、冬に発病する新感温病で、肺経の病変が中心、津液を損傷しやすい、初期に銀翹散、桑菊飲、麻杏石甘湯を用いる。春温は春に発病する伏気の温病〔新感〕、初期から氣分熱が見られ、病状が重い、初期に梔子豉湯、涼膈散、白虎湯を用いる。伏暑は秋、冬に発病する伏気の急性熱病、夏に感受した暑湿の留邪と深秋霜降の秋冬の時邪の誘発と関連し、初期は解表清裏の黄連香薷散、蒿芩清胆湯を用いる。秋燥は秋に発病する新感温病で、初期から乾燥症状、病状が軽く、初秋に温燥、深秋は涼燥と考え、桑杏湯、清燥救肺湯を用いる。温疫は季節に関係なく、感染性を持つ穢濁の疾患；温毒は温毒の邪気に感染し、局所の紅腫熱痛、化膿が見られ、普濟消毒飲を用いる。

傷寒と温病はともに外感病に用いる理論体系、広義の傷寒には温病が含まれている、それぞれ強調している病因が異なるが、侵入する法則は陽から陰、浅から深、上から下で共通している。傷寒論の治療が寒に詳、温に略と言われている、治療段階によって傷寒と温病を選択し、同時に用いることも大切。

略歴

1975年 中国北京中医薬大学・医学部卒業
 1979年まで 中国北京中医薬大学・付属第一病院・内科勤務
 来日後～現在まで 日本各地の中医学研究会などで、中医学の講義を担当

漢方相談（日本医師と）：日本医科大学・池袋大沢眼科・松島産婦人科病院